『人文学報』第102号（2012年３月）
（京都大学人文科学研究所）

なぜ国際関係論における宗教に注目するのか？

ティモシー・フィッツジェラルド*
（成定洋子**・田中雅一*** 訳）

1　は　じ　め　に――オリエンタリズム概念としての宗教

国際関係論の専門家であるロバート・M・ボスコ（Robert M. Bosco）の論文「根強いオリエンタリズム：国際関係論における宗教の概念」（*Persistent Orientalism : The Concept of Religion in International Relationship. Journal of International Relations and Development*, 12 : 90–111, 2009）のお蔭で，私は国際関係論における宗教というトピックに幾分注目することとなった。ボスコは学際的な衝動に突き動かされて，特に9．11以降の国際関係論における宗教に関わる最近の言説と国際関係論におけるイスラームについての懸念とを，宗教研究において何年間か続けられてきた「宗教」というカテゴリーに関する批判的議論に結びつけようとしていた。宗教研究者が討論してきたいくつかの考えをきちんとまとめ，そしてそのような重要なトピックに学際的な共同作業が妥当かつ必要であることを示そうとしている点で刺激的な論文だと私は思った。また，ボスコの論文には，宗教に関する研究のなかで私たちが話してきたことについて，彼自身の専門分野が関心を示していなかったことへの批判も含まれていた。同様の批判は，政府の政策，政治に関係するシンク・タンク，政治・経済的分析，様々な種類の国際機関といった権力の中枢と密接な関係があるがゆえにまったくもって極めて重要な学問分野である国際関係論を無視する宗教学（或いは，恐らく人類学や他の学問分野）に携わる私たちにも当てはまるだろう。

宗教の現代神話を再生産するエイジェンシーとしての国際関係論を，私自身が探求する動機の一つは，紛争と暴力に関わるこの学問分野と宗教との深い結びつき方にある[1)]。これは，特に，理性的な政治から「追放」されていた「宗教」が近年安全圏に戻ってきたが，現在は暴力

* ティモシー・フィッツジェラルド　スターリング大学（スコットランド）
** なりさだ ようこ　東京学芸大学
*** たなか まさかず　京都大学

的に「復活」していると，国際関係論のなかで強く信じられてきた理由となってきた 9. 11 以降のことである。私には，理性的な世俗主義者たちの平和的な仕事を悪意を持って破壊するエイジェントとして働くという「宗教」のイメージが特に印象的だった。このような「宗教」のイメージは，抽象的なカテゴリーに決断と意志を与えがちである神話言語を示唆している。しかし，宗教と紛争との間には特別な結びつきがあることは 9. 11 以前からかなり長い間信じられてきた。血塗られた宗教戦争を終結へと導いた 1648 年のウェストファリア条約締結後，宗教はその結果勃興した新しい世俗国家[2)]によって安全に隔離されたと議論している人たちもいる。また，世界政治を分析するために生まれた理性的な世俗的学問分野である国際関係論は，長い経緯を経て，このような歴史的源泉から生まれたのだという考えも示されている。一旦，非理性的で暴力的な宗教が飼い慣らされ，統治の縁にある場所にうまく配置されると，少なくともヨーロッパと北アメリカにおいては，国際関係論は国政・外交術の科学として登場することができたのだ。

2 「宗教的」恐怖の興隆

論文「宗教的ナショナリズムの登場と紛争 —— 1945～2001 年の民族紛争と革命戦争」（The Rise of Religious Nationalism and Conflict : Ethnic Conflict and Revolutionary Wars, 1945-2001. *Journal of Peace Research* 41（6）, 715-731, 2004.）のなかで，ジョナサン・フォックス（Jonathan Fox）は，国際関係論と，政治学や社会科学などの関連する学問分野における支配的なパラダイムについて，以下のように適切にまとめている。

> 二十世紀の大半の間，このトピックについての社会科学における支配的パラダイムは，宗教が現代社会や政治における役割を何も果たすことができないであろうというものだった。このパラダイムの政治科学バージョン，すなわち近代化理論は，近代化に生来的に備わっている過程は必然的に政治における民族や宗教のような基本原理となる要因を終焉をさせるであろうということを前提とする。このような過程には，都市化，経済発展，現代社会組織，識字率と教育の普及率の上昇，多文化主義，科学技術における発展が含まれている。関連文献はエスニシティに焦点を当てがちだが，宗教にも明らかに当てはまる。対照的に，世俗化理論，すなわち近代化理論の社会学的類似物は，宗教に焦点を当てている。世俗化理論は，近代化理論によって引用される同じ要因が宗教の終焉を導き，世俗的かつ理性的，科学的現象に取って代わられることを前提としている（Fox, p. 716）。

特に国際関係論について書く際，フォックスはごく最近までこの学問分野は基本的に宗教とい

うトピックを無視してきたと述べている。彼は，フィルポットの研究成果[3)]を引用し，1980～1999 年の間，「四大国際関係学会誌（*International Organization, International Studies Quarterly, International Security, World Politics*）の約 1600 本の論文のうち，たった六本の論文だけが「宗教を重要な影響として特徴づけ」ており，*Millennium* の 29 巻 3 号（2000 年）だけが宗教についての特別号を組んでいた」と述べる（Fox 2004 : 717，n. 4）。

ここに二つの疑問が生まれる。第一に，なぜ「宗教」は，1980 年ごろまで，世界政治における重要な要素として，国際関係論の理論家たちに広範囲に渡って無視されてきたのだろうか。第二に，なぜ「宗教」は突然このように大きな関心事となったのだろうか。フォックスは，第一の疑問に次のように答えている。

> 国際関係論は，なぜ宗教が重要ではないかという理論を立てるのではなく，むしろ，宗教を含まない要因に焦点を当てがちだった。現実主義や自由主義，グローバリズムのようなパラダイムは，軍事的・経済的要素と同様に，宗教にほとんど余地を残さない理性的な計算を重要視した。この傾向は，国際関係論の学術的研究が，なかでも，戦争を引き起こす宗教の時代は終わったという信念に基づいているという事実に遡ることができる（Fox, p. 716）。

ちなみに，この引用によると，理性的な計算や軍事的・経済的要素を重要視するパラダイムは「宗教にほとんど余地を残さない」。このことは，「宗教」が，戦争或いは経済と（国際関係論や社会科学の文献上では）関係ない，または（理想的には）全く関係ないこと，そして理性によって特徴づけられていないことを示している。

では，国際関係論の専門家たちの思考において，なぜ宗教に割くページ数が劇的に増加したのだろうか。国際政治において宗教は重要な役割を果たさないということについてのすべての前提は，1970 年代後半から 1980 年代前半まで，イラン革命，米国政治における宗教の権利の台頭，1993 年のテキサス州ウェーコーでの出来事，そして勿論 9．11 のような出来事の結果として，疑問視されるようになったのである。これらの出来事は，以下のような刺激的な効果をもたらした。

> 21 世紀の初めまでに理論上かなりの部分が発展し，宗教は近代の時代にも依然重要であると提起することになった。この理論は，ある程度，現場の事実から生まれた。単純に言えば，現実の世の中の出来事が，宗教の終焉に関する理論に反証したのである。これらの事件をいくつか挙げてみよう。2001 年 9 月 11 日のテロリスト攻撃を含むオサマ・ビン・ラディンのアルカイダの行為，イラン革命，宗教原理主義の世界規模での勃興，勿論これ

らに限られるわけではないが，エジプト，アルジェリア，アフガニスタンを含むイスラーム世界の宗教的反乱や反対運動，ラテンアメリカにおける解放神学運動のような宗教・政治紛争，チェチェン，東チモール，チベット，スーダン，スリランカにおける同様の民族・宗教による紛争。この理論の核となるのは，宗教が近代の政治・社会的現象にとって必要不可欠であることを前提としている。宗教は文明化の不可欠な基盤であると同時に，ナショナリズムやウェストファリア国家体制のような近代の政治現象のための土台の一つであると言われている。多くの人々にとって，宗教は依然として個人的な倫理や政治的選択に影響を与えるものである（Fox, pp. 717-718）。

フォックスの要約から明らかになるのは，国際関係論ならびにその関連分野において，そして恐らくフォックス自身にとって，「宗教」は「現場の事実」であるということである。実証主義的観察は，宗教がまだ生きており活動的であること，宗教がその終焉に遭遇したという以前の実証主義的データは幻想であると証明されたことを私たちに物語る。これは証言として表わされる。私たちは，私たちが考えていることが，眠っているにせよ死んでいるにせよ，地面に横たわっている身体であったのかと思っていた。それが突然動き出したのである。それから，それは急に飛び上がり，私たちに襲いかかった。さらに，この生ける屍はたくさんの仮面を被っている。イスラームは多数の場所で反乱やテロリズムを引き起こす宗教である，アルカイダは宗教的なテロリストの組織である，イラン革命は宗教的な革命である，などなど。これらは現実に基づいた事実となるのである。

このような見方に基づいた宗教は，観察データの一片である。さらに，この実証主義的な目撃は，宗教が紛争や暴力と深く結びついていることを科学的に立証する。しかし，「宗教」は本当に観察可能な現象なのか。宗教は一般的な分類カテゴリーである。私たちは様々なやり方で人々が振る舞うのを見る。そして，私たちは「宗教的な行動」「政治的な行動」「経済的な行動」或いは「民族」の主張のような，一つ，或いはいくつもの私たちの一般的なカテゴリーを当てはめる。しかし，これ以上に，「宗教」はイデオロギー上せめぎ合う分類カテゴリーである。「宗教」または「異教信仰」と見なされるものは，例えば，カトリック信者とプロテスタント信者が何百年も論争してきたことであり，「政治」運動と違って「宗教」運動であると見なされるのは，自明の情報ではなく，価値判断と暗示的ないしは明示的基準に基づいた分類的な決定なのである。

この分析に関わる問題に対して，フォックスが利用するのは二つの表現方法――「宗教・政治的」と「宗教・民族的」である。これらは，さらに大きな意味の問題に注意を促す。「宗教」と「政治」は別々の現象なのだろうか？　もしそうならば，それらは，誰によって，どのように，何のために，区別されるのか。

このような言語の使用から，それ自身深く神秘化されたイデオロギーである社会科学のパラダイムが，公平無私の立場から「現場の事実」を報告するというのは嘘であることが分かる。なぜなら，私は，フォックスが「宗教」という用語にはっきりとした意味を付与できないこと，また，宗教の様々な具体的な形態において，宗教が非宗教的運動やグループから区別されることができないということを示そうとしているからである。

フォックスの要約は，国際関係論や関連分野で広く語られたり信じられたりしている話の一部である。この話とは以下のようなものである。ウェストファリア条約以降，宗教に受け継がれていた暴力は隔離され，「信仰」という周辺的で私的な権利に，すなわち世界政治や国民国家という理性的な仕事から切り離されて，内面的な良心という単に個々人の事柄に変容させられてきた。様々な表示形態をとって世俗的な理性はヨーロッパや北アメリカにおいて築かれ，世俗化，近代化，グローバル化の過程を通して，無害で平和志向的影響を次第に押し広げるようになった。様々な種類の行為者（アクター）（特に国民国家）の間の利害をめぐる紛争は今も続いているけれども，これらはもはや宗教の非理性的な狂信的行為にはまり込んでいるのではなく，少なくとも基本的には，理性的な調停や紛争解決に至るようになってきた。しかし，暴力事件が続いていたため社会科学者たちは自身の誤りに直面することになった。宗教は結局のところ死んでいなかったが，単に「追放」されていたのであり，まるで，生き返ってきたか永い眠りから目覚めたかのように，近年になって「復活」してきたのである。これらの物語をすこしでも考えてみると，これらを神話の領域に位置づけて当然なのである。

3　宗教と暴力の特別な関係は統計的に証明できるという主張について

フォックスは，論文のなかで「宗教」が非宗教的な信念と実践とは異なる特別な種類の信念と実践であることを問題化していない。論文を通して，彼は，宗教的なナショナリズムと非宗教的なナショナリズム，宗教的な民族と非宗教的な民族の間の差異を，まるでこれらが観察できる事実という事柄に言及しているだけのカテゴリーであるかのように，問題に付すことなく，再循環させているのである。この相違自体は単に当然視されている。彼自身は，宗教がこの世界において行為者（アクター）またはエイジェントであるか問うていない。また彼は，「宗教」が特別に非理性的な悪意に満ちた行為になりがちである神話を疑問視することもしていない。反対に，彼の論文はこのことを統計的に証明しようとしている。フォックスの意図は言説の基本的な要素を批判的に問題化することではない。彼の目的は，むしろ，近代化と世俗化の理論はそれらが「宗教」が次第に消えてなくなるだろうと主張する限りにおいてのみ間違っていると証明することにある。逆に，宗教は復活した。そもそも決して本当になくなってはいなかったのだ。

フォックスは，宗教と暴力を結びつける伝統が長く存在しているが，そのような伝統は，1980年代，1990年代以来，多くの学者たちによって，極めて熱心に主張されてきたと指摘する。彼が挙げる一例は，マーク・ユルゲンマイヤーである。かれは，最近までアメリカ宗教学会の会長であり，フォックスの論文のなかに三回（'Sacrifice and Cosmic War', *Journal of Terrorism and Political Violence* 3（3）: 101-117, 1991 ; *The New Cold War?* Berkeley, CA : University of California Press, 1993 ; *Terror in the Mind of God : The Global Rise of Religious Violence,* Berkeley, CA : University of California Press）引用されている宗教学の専門家である。ユルゲンスマイヤーは国際関係論の著者たちによく引用されている人々の一人なのである。

フォックスは「危機に瀕するマイノリティ」(Minorities at Risk : MAR）と「国家の失策（State Failure : SF）という二つのデータベースの統計を用いて，「宗教」と紛争の間の重要な関係を打ち立てようとしている。要約のなかで彼は次のように述べている。

> MARのデータの分析は，1980年まで宗教的なナショナリズムと非宗教的なナショナリズムはほぼ同じくらいの紛争を引き起こしていたが，1980年以後は，非宗教的なナショナリストのグループと比べて，宗教的なナショナリストの民族集団の方が，ますます多くの暴力的な紛争の原因となってきたことを示している。SFのデータ分析は，1965年ごろに宗教的な暴力が始まったことを指し示している（Fox, p. 715)。

フォックスは二つのデータの分析から三つの結論を引き出している。「第一に，これらは宗教が紛争に影響を与えることができることを示しているが，これは単なる影響ではない。第二に，宗教の紛争に対する影響は時間を経て変化する。第三に，紛争に対する宗教の影響は増えている。このことは，二十世紀の大半，西欧の社会科学の支配的パラダイムであり，現代における連関する政治・社会的力としての宗教の終焉を予測していた近代化理論や世俗化理論と矛盾する」(Fox 2004 : 715)。関心さえあれば簡単にアクセスできるフォックスの分析について，これ以上，詳しく述べる必要はないだろう。私の主な関心事は分類についての問題である。フォックスが宗教的少数民族と非宗教的少数民族，宗教的ナショナリズムと非宗教的ナショナリズム，そして宗教的暴力と非宗教的暴力を区別するのならば，読者は，何を「宗教的」とみなし，何を「非宗教的」とみなすのか知る必要がある。これは基本的なことである。結局，彼は結論で，事実に関する，いくつかの重要でポジティブな知識を持っていることを主張する。しかし，この知識は，もしも宗教的実践が非宗教的実践と異なるという基本的な前提が明らかで説得力のある内容を持っている場合にのみ，信頼出来うるものとなる。「宗教的」であると分類される集団は，不合理性や野蛮な暴力に固有な傾向と深く関連しているとするなら多くが問題である。

4　MAR データベースと「宗教」の定義

この点において，科学・統計的方法論を擁護することは，MAR と SF の二つのデータベースが「宗教」でもって何を意味しているのか確認するために，これらのデータベースについて考察を行うべきであるという主張を考慮することであるかもしれない。フォックスによる分析データは全てこれらによってもたらされたものなので，彼の唯一の欠点は，それらを明確にすることに読者の注意を促すことを忘れてしまったことだと言えるだろう。また，もし，社会科学者が有益な結論を生み出すために，「宗教」の意味や定義を論じている膨大な量の出版物のうちのいくつかを考慮に入れた哲学的立場に基づいた理論的議論を毎回行うのは単に実際的ではないと，理性的に主張されることもあるだろう。寛大であるためには，私たちは，彼が，黙って注釈なしに，これらの組織が採用した非宗教に対比される宗教という戦略的な定義を採用したのだと思うべきである。

たとえ「宗教」が多様な集団や紛争状態における彼らの実践を分類することに使用されてきたカテゴリーの一つであるとしても，私自身は，MAR のホームページに，そのような定義や理論的議論を見つけることはできなかった。そこで，私は MAR のグループ（メリーランド大学・国際開発と紛争管理のためのセンターにおける「危機に瀕するマイノリティ」プロジェクト）にメールを送り，彼らの「宗教」に関する作業上の定義について教えてくれるよう頼んだ。私がそうしたのは，このことが，例えば，どのように「宗教的」な集団が，非宗教的「政治的」集団と区別されることができるのか，或いは，「宗教的」暴力は，どのように「非宗教的」或いは世俗的暴力と区別されることができるのかに直接的に影響を与えるからである。彼らは，親切にも以下の返答をくれた。

> 私たちの目的にとって，宗教は，儀礼/儀式，物語，シンボリズム，道徳基準のいくつかの組み合わせを含む，超自然的秩序を信じる伝統として定義されています。データにおいては，宗教は，私たちが，多数派集団とある民族集団との違いを測る変数の一つです（2010 年 6 月 15 日の個人メール）。

ここで決定的な用語は「超自然的秩序」である。私がこう言うのは，他の言及されている基準 —— 儀礼/儀式，物語，シンボリズム，道徳基準 —— が，例によって「政治的」と分類されているものを含む信仰，慣習，実践という広い範囲に問題なく適用されるだろうからである。これは，「宗教」は「超自然的」なものを信じることによって必然的に特徴づけられるというよくある前提である。それは，「宗教的」信仰と実践を非宗教的なそれらから区別するためによく使われてきた典型的な定義上の基準である。しかし，それはまた人類学，宗教学，アジア

研究においてはなじみ深い，よく論争されてきた基準でもある。そこで，私はこの組織に「超自然的秩序」のための基準についてのメールを再び送り，以下の回答を得た（2010年6月15日）。

> 私たちは，専門家でない人の「超自然的秩序」についての理解に従っています。MARでの私たちの目的は，宗教を理解することではなく，むしろ，民族集団の政治的動員を理解することです。従って，私たちの目的に「超自然的秩序」の定義の緻密さは無関係です。もし，あなたが研究しておられる特定の民族集団についてご質問がありましたら，どうぞお知らせください。

この回答は，私にとって，たくさんの理由から明らかに問題を含んでいる。「私たちは，専門家でない人の理解に従っています」ということは大変民主主義的に聞こえるかもしれない。しかし，彼らは，何が専門家でない人の理解であると確認できる研究をしてきたのだろうか。そして，専門家でない人の理解は，あらゆる言語集団による専門家でない人々を網羅しているのか，それとも単に英語を話す人たちだけを含んでいるのだろうか。そして，彼らの組織が，暴力の高いレベルと関係があると思われる特別な要因として「宗教」に関するデータをフォックスのような専門家の人々に提供するのだとしたら，素人或いは専門家の人々が，政治や民族とは異なる，分析的に切り離された要素として，宗教や超自然的存在に関する首尾一貫した概念を持っていると理解していると断定することは賢明なことだろうか。目的は「宗教を理解することではなく，むしろ，民族集団の政治的動員を理解することです」と言うこと自体，いかに宗教が政治と民族と異なるのかについて理解していることを前提としている。

世界中の多くの場所で危険な権力争いと関係のある繊細な問題に関する社会科学的知識を生み出す，このような非常に高資金で運営されているデータベースの合理性は粗野すぎるために主要なカテゴリーをきちんと配置することができない。それは「無関係」なのであり，単に「緻密さ」の問題なのである。このことは，分類の主要な基準として争点となりやすいカテゴリーの使用に対する，驚くほどおざなりで否定的なアプローチに見える。

メリーランド大学の「国際開発と紛争管理のためのセンターにおけるプロジェクト」として言及されている，フォックスが依存するMARのデータはまた「テロリズム及びテロリズムへの対抗措置について研究する米国のコンソーシアム」，アメリカ合衆国国土安全保障省にも属している。反テロリスト団体へのアドバイスとして，「宗教的」テロリスト集団に関する分析をしたイライ・バーマンが議論するように[4]，MARによって生み出され，フォックスが依存する客観的で公平無私な知識は，アメリカ合衆国に深く関係しており，恐らくその戦略に影響を与えていると思われる。

このようなデータの管理者や収集者たちが，これらの問題に関する知的な問題含みの性質に気づかない，或いは無関心であるように見えることとは，好ましくない状況である。このことは，彼らが合衆国のエイジェントとして行動しているときに特に当てはまる。これらの問題の専門家と非専門家たちは「宗教」や「超自然的」のような用語が何を意味するのかを，直ちにかつ直感的に「知る」ことができるという広く信じられている前提がある。しかしながら，少し考えてみると，たとえこれらの英語の用語や，それらが示唆する相違が英語を話す文脈で明瞭かつはっきりしているかもしれないとしても ―― 私は深く疑っているが ――，このことは，これら（の用語）が異なる言語やカテゴリーで思考する人々が理解するものに翻訳されることを意味するものではないだろう。これらの不安定な用語を翻訳しようとする問題は異論を引き起こす。従って，紛争の複雑な状況に関連する「データ」の収集と分類に携わっている社会科学者には，これらの問題を自覚し，方法上正当な形でオープンに議論するという特別に緊急の責任があるように思われる。そうするためには批判的な警戒態勢と学際的な関心を持つことが要求される。

5　事実性のアウラ

私は読者に，「宗教」や「超自然」のような問題のあるカテゴリーについての徐々に増えつつある批判的な文献について考えてもらいたい。概して，「自然な」或いは非宗教的な信仰や実践と区別されることのできる信仰や実践の普遍的な領域を区切る方法としての「超自然」というカテゴリーの正当性に関する議論には，歴史的な蓄積がある。私が言いたいのは，これらの議論に関する広範な学際的な考察に基づいたよく論じられた事例がないのであれば，「超自然」のように問題のある概念に基づいて，私の視点からはそれ自身，キリスト教の歴史の内部においてさえ論争の的になってきたカテゴリーである「宗教」のような核となる用語を作り上げることは危険なことであるということである。どの集団か非理性的な暴力に向かう傾向があり，どの集団がそうならないのかについての知識を組織化する際に鍵となる基準として「宗教」が援用されるとき，このことは特に当てはまる。

私は，「宗教」が何の本質的な意味も持たないこと，「宗教」を「非宗教」から区別することは無意味で恣意的なことであると主張する。何がどの箱に入るかは公平な理性というよりも，権力の問題である。超自然と自然，信仰と知識の間の区別に関する同様の議論を行うことができる。イデオロギー的な仮定の総体は，明瞭で安定した意味をまったく持たない，このような脆弱で変化する二項対立的関係に根拠を置いているということを示すことができよう。意味の相貌は（大体は無意識的な）修辞的な配置によって生み出されるのである。

研究者たちが（これは意識的なマキャベリ的策略ではないけれども）配置する多くの修辞的なト

リックの一つは，鍵となるカテゴリーをめぐる論争の歴史を埋葬し，まるで明晰かつ無実，無害であるかのように，これらのカテゴリーを用いることである。「宗教」のような用語は，常識に属することがらである。それが何を意味し，誰が宗教的な動機のために行動しているかは，明らかである。さらに，そのような用語は，それが，分類対象になっている行為者（アクター）たちの考えていることや動機にどのように，翻訳されるのかということをまったく考慮することなしに，普遍的に当てはめられることができるというわけである。その意図が何であれ，フォックス自身が，単に「現場の事実」を得ようとしている，客観的かつ中立的，公平な社会科学者であることは疑いなく明らかであるとは，私は思わない。この点について，彼が，主要な用語である「宗教」についてきちんとした注意を払っていないし，どのように用いているのか，読者に説明もしていないという事実からも明らかである。

私が見つけることのできた一番近い定義は「宗教的マイノリティとは，マジョリティとは異なる宗教に属するマイノリティと定義する，宗教に関わる不完全なアイデンティティの変数が使用されている」というものだった（Fox 2004 : 720）。これは，空っぽなトートロジーではないかと私は思った。この文は，トランプが崩れるイメージ，或いは，精巧だが車輪のないトロリーのイメージを思い起こさせた。そして，その後には，国際関係論の文献に広く配置された別のイメージ，今まで追放されていたが今またより悪意に満ちて地球を追い掛け回し，国民国家や資本主義企業の理性的な世界秩序を破壊している狂ったエイジェントとしての「宗教」というイメージが浮かんできた。これらのイメージは，「宗教」についての言説が現実を持たない表象，言い換えれば，それにもかかわらず，数多くの怪しい分析を生み出し，外交政策決定と本土安全保障対策を扇動する権力（もしこれを信じることができるのであれば）を持っている虚構が膨らんだものであるという考えを，私に追及させることとなった。

「多変量解析における民族紛争に関する宗教と分離主義の複合的影響」（Fox, p. 721）といった専門的な表現は，「宗教」という用語が彼の文章のなかで全く無意味ではないのだとすれば，感銘を与えるように響くかもしれない。フォックスの研究成果の結論を読むとき，私は読者に，重要そうに聞こえるが空虚なトートロジーである「宗教的マイノリティとは，マジョリティとは異なる宗教に属するマイノリティと定義する宗教に関わる不完全なアイデンティティの変数が使用されている」という文を念頭に置くこと，そして，「宗教」と「宗教の」という表現を全て括弧に入れたうえで，次の文章を読むことを求める。

> 一般的に言えば，本研究の結果は，宗教が紛争に重要な影響を与えることができることを示している。実際，この重要性は本研究が扱った時代に増加した。二つのデータセットから生まれたこれらの結果は，この傾向のタイミングに完全に一致するわけではないけれども，これらは両方ともこの傾向が存在することを立証する。より具体的に言うならば，

MAR のデータセットからの結果は，宗教的なナショナリズムの宗教の要素が，1945～1979 年の間の民族紛争に大きな影響は与えていないが，1980 年代前半以降，民族的な暴力へますます重大なインパクトを与えてきたことを示している。SF データセットからの結果は，宗教的な紛争が，暴力的になる 1965 年頃以前は，他の紛争ほど暴力的ではなかったことを示している。このように，これらの証拠は，本研究によって扱われた時代において，宗教が紛争に与えた影響が増加していることを示唆する。このことは，20 世紀の社会科学者たちの多くが一般的な前提としてきたことと真正面から矛盾する。そして，宗教は紛争に大きな影響を与えるという近年増加している議論の一般的な論点を確証する。これらの結果は，近代の時代に，宗教が復活，または再び活力を得るようになってきていると議論する人々と特に一致する（Fox, p. 727）。

私の考えでは，「宗教」に関わる言説の最も重要な役割は，世俗的な社会科学者や彼らが奉仕する政府機関のイデオロギーを事実性というアウラで覆い隠すことである。このことは，世俗的な社会科学者が，大概は相談されることなしに強制的に分類されてしまう人々よりも，きちんとしているという過大評価を生みだす。

6　近代の神話としての社会科学

社会科学者の多くは，様々な目的 —— フォックスの場合は平和や紛争解決 —— のために有益な知識を生産しようとしている，きちんとした働き者であって，私たち研究者と変わらない。しかし，たとえ，私自身の議論が間違っていて，「宗教」は，普遍的に翻訳可能で，科学的に計測可能な出来事に影響を与えることのできる，明瞭で安定した意味を与えることができるのだとしても，（宗教概念についての）せめぎ合う歴史に少なくともいくつかの注意を払うことは必要である。カテゴリーとしての「宗教」は純粋無垢なものではないということは明らかなように思われる。「宗教」として分類されるものは，同時に暴力と非合理性に向かう生来の傾向を持っているものとして「科学的」に分類される。このカテゴリーはアメリカ合衆国の外交政策や安全保障戦略に深い関係がある。近代国家はマイノリティの分類装置としてこの用語を用いるのだ。もしこのカテゴリーが明瞭で操作可能な定義を持たないのだとしたら，危険なのは，社会科学者または彼らの政治上の主人，そして資金提供者が宗教に含める必要があると考える事柄は何でも簡単に収まってしまうということである。これは陰謀論ではないし，私は完全に意識的な過程に言及しているわけではない。宗教の神話のような神話はそのレベルでは機能しない。神話は余りに自然かつ避けられないものなので，神話を疑問に付すことは奇妙，または有害とさえ見えてしまうからこそ，強力なのである。

しかし，私たちは，フォックスのような書き手が，「宗教」や「非宗教」とそれとの区別が現実的に観察可能な事実であるということをどのように，本当に信じることができるかについて見てきた。しかし勿論，誰も宗教，または「宗教的な」動機を見たことがないということは明らかである。彼は，宗教が，反米紛争を引き起こしたり，非理性的な憎悪を広める複数の場所に同時に現れる特別なエイジェントであると信じることさえできる。専門用語を取り除けば，その下には漫画の登場人物がいる。死んだ状態から蘇ってきて，仮面を被り，化身のように訳もなく異なる形で現れる，強力で邪悪な悪魔が，理性的で世俗的な国家の静かな平和をかき乱すのである。社会科学におけるフォックス自身の信念と実践は，通常「宗教的な信仰」として分類されるものと多くの共通点を持っているようだということを，フォックスが思い浮かべることは決してない。そのような洞察は，彼が「宗教的」とレッテルを貼る暴力的で非理性的な伝統からもたらされる知識より上位にある，世界の客観的知識を与えるものとしての社会科学に対する彼自身の信仰を脅かすことになるだろう。

追記　本論文は，著者の書物，*Religion and Politics in International Relations : the Modern Myth.* London : Continuum（2011）の一部を抜粋・修正し，章題を新たに付け加えて翻訳したものである。フォックスなどの引用文に含まれていた文献注は省略している。必要なら原著にあたってほしい。

注

1）　これらの問題に関する優れた分析，そして「宗教」というカテゴリーに関する独創的な歴史的研究については，William T. Cavanaugh, *The Myth of Religious Violence,* Oxford University Press, 2009 を参照のこと。また，T. Fitzgerald, *Religion and the Secular : History and Colonial Formations,* Equinox, 2007 も参照せよ。

2）　この文脈において「世俗」の意味は極めて曖昧である。むしろ，ウェストファリア条約はこの「世俗」の意味の変化のさらに長い過程のひとつの段階でしかないという人がいるかもしれない。

3）　Daniel Philipott, 2001. The Challenge of September 11 to Secularism in International Relations. *World Politics* 55（1）: 66–95, p. 69.

4）　Eli Berman, 2009, *Radical, Religious, Violent : The New Economics of Terrorism,* Cambridge and London : MIT Press を参照。

要　旨

宗教の現代神話を再生産するエイジェンシーとしての国際関係論を，私自身が探求する動機の一つは，紛争と暴力に関わるこの学問分野と宗教との深い結びつき方にある。これは，特に，理性的な政治から「追放」されていた「宗教」が近年安全圏に戻ってきたが，現在は暴力的に「復活」していると，国際関係論のなかで強く信じられてきた理由となってきた 9．11 以降のことである。私には，理性的な世俗主義者たちの平和的な仕事を悪意を持って破壊するエイジェントとして働くという「宗教」のイメージが特に印象的だった。このような「宗教」のイメージは，抽象的なカテゴリーに決断と意志を与えがちである神話言語を示唆している。しかし，宗教と紛争との間には特別な結びつきがあることは 9. 11 以前からかなり長い間信じられてきた。血塗られた宗教戦争を終結へと導いた 1648 年のウェストファリア条約締結後，宗教はその結果勃興した新しい世俗国家によって安全に隔離されたと議論している人たちもいる。また，世界政治を分析するために生まれた理性的な世俗的学問分野である国際関係論は，長い経緯を経て，このような歴史的源泉から生まれたのだという考えも示されている。一旦，非理性的で暴力的な宗教が飼い慣らされ，統治の縁にある場所にうまく配置されると，少なくともヨーロッパと北アメリカにおいては，国際関係論は国政・外交術の科学として登場することができたのだ。

キーワード：暴力，世俗化，ウェストファリア条約，オリエンタリズム，イスラーム

Abstract

One of my own motives for investigating International Relations as an agency for the reproduction of the modern myth of religion is the way religion is strongly linked in that discipline with conflict and violence. This is especially true since 9/11, which has been the most powerful source of the belief in IR that 'religion' has recently returned from its 'exile' on the safe margins of rational politics, but is now violently 'resurging'. The images of 'religion' acting as an agent of malign disruption of the peaceful work of rational secularists seemed to me especially striking and suggested the language of myth, which tends to invest abstract categories with volition and intention. But the belief in the special connection between religion and conflict has a much longer history than 9/11. Some of the writers argue that after the Treaty of Westphalia in 1648, which brought the bloody Wars of Religion to a close, religion was safely quarantined by the new secular states, which also came into being as a result. The idea is also mooted that International Relations as a rational secular discipline for the analysis of world politics derived in the long run from these same historical sources. Once irrational and violent religion had been tamed and put into its proper place at the margins of government, at least in Europe and North America, then International Relations could emerge as the science of statecraft.

Key words : violence, seculaization, The Treaty of West Phalia, Orientalism, Islam